

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
白井アキ子	女 性	8 6 歳 H27.8.15 現在	1 6 歳	黒 田

「豊川海軍工廠 ～ 悪夢にうなされ続けました」

私は昭和18年3月に卒業し、岡崎の紡績工場に勤めていましたが、12月に海軍工廠へ移りました。黒田から自転車で新城駅へ行き、6時45分発の工員電車で通いました。電車はいつも満員で、押し込まれるようにして乗り込みました。昭和20年の1月からは、東新町の叔父の家から通うことになりました。叔父の奥さんは産婆さん（助産婦）で、他にも見習いの人が3人住んでいました。叔父は海軍工廠で正門の守衛をしていました。工廠の東にある駅に着くと、入口に架けてある赤字で書かれた木簡といわれた木札をとり、事務所前で黒字の名前を表にして架けます。私の木札には名前の他に60銭と書かれていました。16歳未満の日当は60銭で、16歳になると80銭になりました。

私の職場は、火工部第1装填25ミリ機銃信管組立工場の森井班で50人ぐらいいました。1日に1800個の機銃の弾丸を作ることが日課でした。細かな作業で取り付けが難しく、それだけの作業をこなすのは大変なことでした。私たちの班長はとても厳しく、昼休みもないほど必死に作っていました。

空襲は何回かありました。警報は3段階になっていて、最初は警戒警報、次に退避命令、一番危険なのは空襲警報でした。訓練は何回もしたわけではありませんが、入る防空壕はあらかじめ工場のすぐ横と決められていました。

8月7日は、いきなり退避命令と空襲警報が出されました。急いで防空頭巾をかぶり、身支度をしてすぐ横の30人ぐらい入れる防空壕に飛び込みました。私は最後の方で、入口に近いところにいました。すると、目の前の太い松の木が爆風で折れて落ちてきたのです。これはただごとではない。このままここには危ないと直感しました。私が「逃げるよ」と言うと、伍長さんが後ろから「危ない！外に出るな！」と叫びました。それでも私は、1波の後に防空壕を一人で飛び出しました。外はものすごい土煙でした。

すぐに「シュー、シュー」と、爆弾が落ちてくる音が聞こえてきます。10mも行かないうちに、あわてて目と耳を押さえて地面に伏せました。「ドッシーン」とものすごい地響きです。すぐ近くに落ちたのか、地面が大きくゆれ、体が浮き上がりました。必死に地面をつかみながら、じっと伏せたまま待ちます。2波が



当時の工員服姿の白井さん

おさまったとみて、再び走ろうとしました。すると、すぐ目の前にモンペの腰から下が削られたようになった工員さんが倒れていました。爆弾の破片が当たったのか爆風なのか分かりませんが、助ける余裕なんてありません。土煙でよく見えない中を北門に向かって走りました。するとまた「シュー、シュー」と落ちてきます。また地べたに伏せます。再びものすごい音と地響き、爆風です。そんなことを4回ぐらい繰り返すと、やっと北門近くにたどり着きました。助かったのかなと思いましたが、口の中から体中、どこもかしこも砂だらけです。近くの田んぼの水で口をゆすぎ、顔を洗いました。目にも砂が入りましたが、痛いと感じる暇もありませんでした。

空爆がおさまって、北門付近で点呼がありました。幸いなことに、同じ火工部である防空壕にいた人達もみんな無事でした。抱き合っただ喜びましたが、他の防空壕にいて亡くなった人も大勢いました。どのタイミングでどこにいたか、どちらに逃げたかで命運が分かれたようです。

私は、一鉄田の子と飯田線に乗って帰ろうと思って、変わりはてた景色のなか、飯田線の線路に沿って一宮駅まで歩きました。そこで水をもらって飲み、やっと生きた心地がしました。電車に乗ることができ、やっとの思いで叔父の家にとどり着くことができました。「ああ、命があってよかった。」と思いました。

叔母さんや子ども、見習いの人たちもみんな喜んでくれました。でも、叔父さんが戻らないのです。近所の人も心配して来ました。叔父さんがいた正門が分かるのは私だけです。確かめに行つてほしいと言われました。お世話になっている叔父さんのことです。断ることはできません。私は意を決して、一人で自転車で工場まで行くことにしました。でも、体が硬直し、震えて困りました。

豊川駅の近くについた頃には暗くなっていました。灯火管制で明かりもありません。星明かりを頼りに正門付近まで行きました。寄宿舎があった付近でしょうか、大勢の工員のすすり泣きが聞こえてきました。何人かの友だちが亡くなったのでしょう。正門があった場所に、むしろに貼った障子紙に対策本部と書いてありました。私が「正門で守衛をしていた犬飼茂雄を知りませんか。」と尋ねると、「犬飼さんの死骸を見たので亡くなったよ。」と言われた人がいました。叔父さんはとても厳格な人でした。以前に聞いたことがあります。「自分は空襲警報になつても、スパイが入り込むから、絶対に門から逃げたりはできない。」と。一番逃げやすい場所にも、叔父はその場を動かなかつたに違いありません。

そこには10分はいなかつたと思います。叔父の死を聞いたショックも重なり、私は体が硬くなるほど緊張して、自転車で乗ったり降りたりしながらやっと豊川駅まで着きました。夜の9時過ぎだったのでしょうか。新城まではとても行けないと思い、近くの家に自転車を預け、遅い電車で新城まで帰りました。東新町の駅から叔父の家まで歩いて帰ると、おばさんと子ども二人、見習い三人が座って待

っていました。私は、声をしぼり出すように叔父さんが亡くなったことを告げると、気を失ってしまいました。それまでの緊張から開放されたためなのか、役目を果たせた安堵感だったのでしょゆか。それまでは、恐怖と緊張で体がカチカチに固くなってどうしようもありませんでした。涙なんて一つも出ませんでした。その後、10年ぐらい同じような夢にうなされ続けました。

翌日は駅前に預けた自転車をもらいに行き、翌々日に工廠に集まりました。工廠の付近は、死臭がただよっていました。8畳ぐらいの大きな穴があちこちに空いていました。森井班が集まる場所には爆弾の破片がくすがっていました。機銃の弾丸も散らばっています。私たちは散乱した材料や残骸の整理をしました。弾丸を集めていると、しめってとろけそうになったものが落ちていました。よく見ると、親指でした。腹がポンポンにふくれあがった馬が、足を四本上に向けて死んでいるのも見ました。

男子工員は、埋まった防空壕を掘りおこす仕事をしていました。遺体の多くは、すでに体が3倍ぐらいにふくれ、くずれそうになっています。3人がかりでさげて運んでいましたが、思わず目をそむけました。千両の方の山へ車で運んでいたと思います。なぜか、手足の爪ががない死体もたくさん見かけました。地面でもがいたにちがいません。

○ 厳しかった規律とお仕置

森井班の班長はととても頑固で厳しい人でした。特に勤務態度には厳しく、笑顔は厳禁でした。男女で話したり、恋愛などはもってのほかで即刻クビでした。

きまりを守らなかつたり態度が悪かつたりすると、厳しい体罰やお仕置がありました。男性は小さな腰掛けにバケツ両方に水を入れて立たされるのを見ました。女性は、洗濯板のような刻みをもっと荒く作った台があつて、その上に座らせられていました。骨までへこむんじゃないかと思いました。まるで江戸時代の拷問ですよ。無断欠勤の罰は当然でも、病気を理由に休んでも、診断書がないと認めてもらえませんでした。当時は、医者診断書なんてなかなかもらえせんし、書いてもらふ暇なんてあるはずもありません。とてもよく仕事のできた高橋伍長さんは、何の落ち度があつたのか道路作業の仕事に替えられました。聞くところによると、女の人とにこにこして話をしたのが原因とのことでした。ですから、仕事は休めない、笑顔が全くない世界でした。